

# 私部城跡の発掘調査速報 2020

2020. 11. 29 交野市役所別館中会議室

交野市教育委員会

## 私部城跡

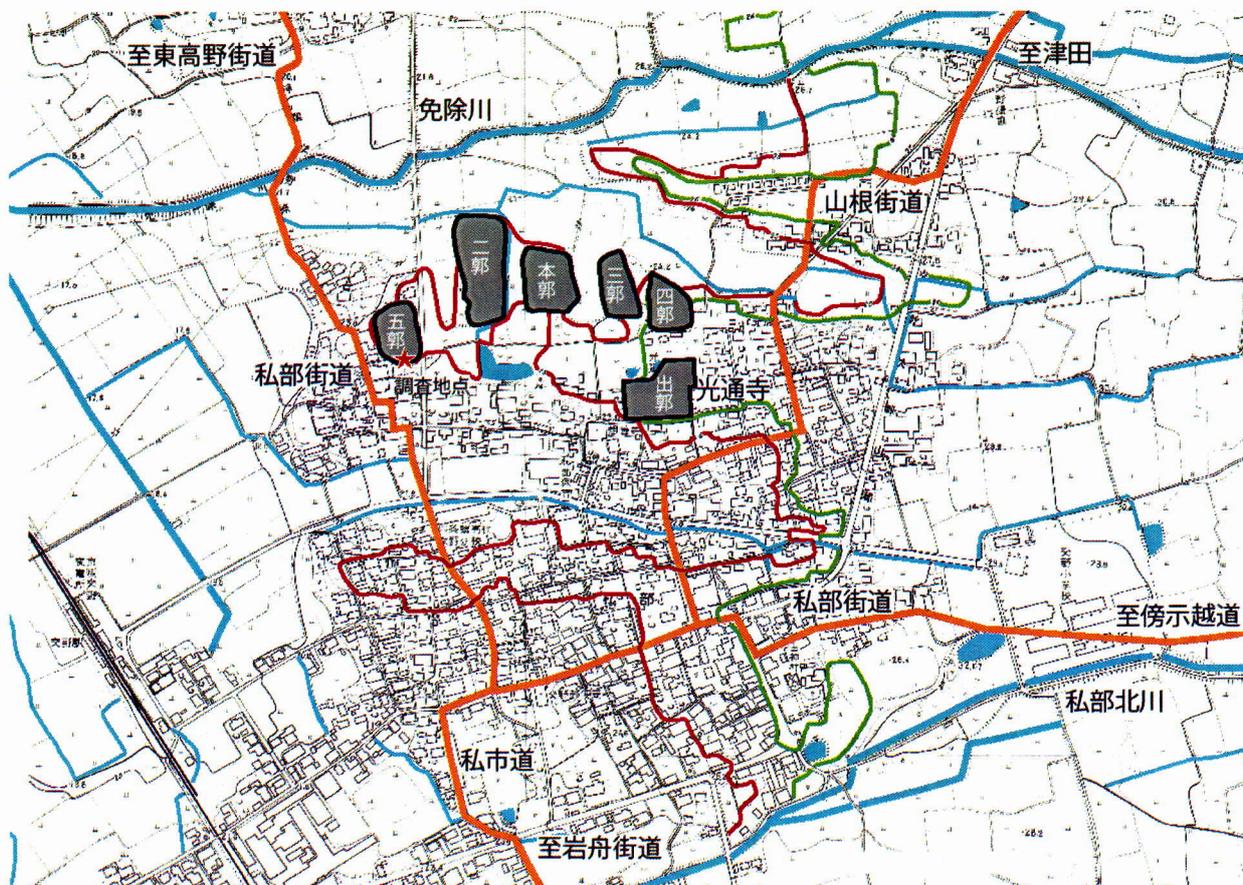
歴史上に初めて私部城（交野城）が登場するのは、元亀元年（1570）です。

河内国で敵対勢力と戦う織田信長軍に味方した勢力の一つとして、安見右近という人物が私部城主であったと伝えられています。

戦国時代末期の城である私部城は、丘陵と谷が入り混じる地形を巧みに利用して平地に築かれた平地城郭で、直線的に郭（曲輪）を連ねる「連郭式」と呼ばれる構造になります。また、この時期の平地城郭は大阪府内でも大変希少な例と言えます。

『日本城郭体系』で城の「縄張り図」が紹介され、城郭研究者のみならず、市民の間にも広く周知されるようになりました。

現在は 2018 年度に本郭、二郭の一部が交野市指定文化財（史跡私部城跡）に指定され、保存・活用されています。



調査地点と周辺の環境図

## 調査の概要

交野市教育委員会は、交野市私部3丁目所在の私部城跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査面積は約170㎡です。

私部城跡は、16世紀後半（戦国時代末期）頃の城跡で、平地に築かれていることから「平地城郭」と呼ばれています。この時期の平地城郭は、羽曳野市の高屋城、東大阪市の若江城が有名です。

私部城は現在のところ、本郭、二郭、三郭、四郭とその周辺の小ぶりの郭の存在が明らかとなっています。これらの郭が、東西の尾根上に連なっていることから「連郭式」と呼ばれています。

今回新たに確認された郭は、尾根の先端で私部街道に面しており、城の玄関口ともいえる場所にあります。また、郭の構築方法や土塁・堀などの防御施設も備えていたことが明らかになりました。

さらに、堀の中の土層の堆積状況から落城時の様子も窺うことができました。

今回の調査成果は、私部城のみならず戦国時代の城郭の構造研究にも大きな影響を与えることになると思われます。

## 発掘調査

私部城の発掘調査は、古くは1960年代から郷土史家である奥野平次氏の指導により交野古文化同好会によって実施されました。調査は市道敷設に伴うもので、三郭付近で断面図などの記録が残され、貴重な報告となっています。

今回の調査地は、交野市私部3丁目の私部街道の東側に隣接した所で、城の玄関口とも言える場所にあたります。昭和36年に大阪府が作成した地形図によれば、今回の調査地から北に標高26mの等高線が巡る台地の広がりが見られます。現在はその台地状の高まりの大部分は『交野郵便局』となっています。

今回の調査地は『交野郵便局』南隣の台地の南端から、南側の斜面及び谷部分までです。

調査前の様子としては、調査地の北部の竹藪に台地状の高まりが見られ、古い地形が良く残っていることをあらわしていました。

調査はまず幅1m、長さ21mの南北方向の確認調査トレンチを設定し、土層の堆積状況や遺構の残存状況を確認したところ、台地の上部には盛土を施していることが判明し、郭の存在が明らかになりました。また、その南には谷地形となる旧地形が存在し、現在は埋没しているものの、18世紀頃までは開口していたこともわかりました。

## 調査の成果（遺構模式図・断面模式図・郭の築造模式図）

今回の発掘調査では、昭和36年作成の地形図や昭和23年撮影の航空写真で見られた台地状の高まりが、郭（曲輪）であることが確認できました。

また、その郭の南側には土塁が存在し、郭の南側の斜面と土塁に挟まれた部分が堀になることも明らかになりました。

新たに確認された私部城の郭は私部街道に隣接しており、私部城の玄関口の位置にあたるといえます。

以下、郭や土塁の構造そして、堀の埋没状況について述べることにします。郭の構造を知るために、南側斜面の層序を観察すると、下層より黄茶色粘土、その上部に茶褐色粘質土と暗褐色粘質土（共に瓦、土器含む）、さらにその上部は灰褐色粘質土（白色粘土ブロック多量に含む）の順に堆積しています。

下層の黄茶色粘土は丘陵を形成する基盤層で、一般的には地山とよばれる土壌です。その南側斜面に小さく砕いた瓦を大量に含む茶褐色粘質土及び暗褐色粘質土を、丘陵斜面に積んで郭のベースを拡張しています。また、小さく砕いた瓦を大量に混ぜ込んでいるのは、土を締め固めるためと考えられます。

今回の調査で出土した瓦や陶器類は、大半が郭の盛土下層の茶褐色粘質土・暗褐色粘質土から出土したものです。したがって私部城の郭の構築に使われたもので、私部城に使用されたものではありません。そして、その拡張したベースの上に盛土をのせて、郭を構築しています。盛土には版築や締め固めの様相は認められません。郭の南側斜面には、写真に見える様に石垣等の土留めの細工も見られません。

### 土塁の構造（遺構模式図・断面模式図）

調査地の東壁の断面模式図（写真）を見ると、郭南部の地山上に約2mの盛土が確認できます。これを土塁と考えています。

土塁はほぼ郭と同じ高さまで盛り上げています。土質も郭と同じ灰褐色粘質土です。

土塁も郭の盛土と同様、版築や締め固めの痕跡は認められません。

### 堀の構造と埋没状況（遺構模式図・断面模式図）

郭の南斜面と土塁の北斜面の間が堀となります。堀の断面は『V字』状で、このような堀を「薬研堀」（やげんぼり）と呼ばれています。

堀の埋没状況は、基本的には城が存続した期間は堀としての機能を果たすために、堆積物は認められないはずですから断面の観察によって確認できる土層の堆積状況は、堀としての機能を失って以降、すなわち城から見れば落城以降ということになります。

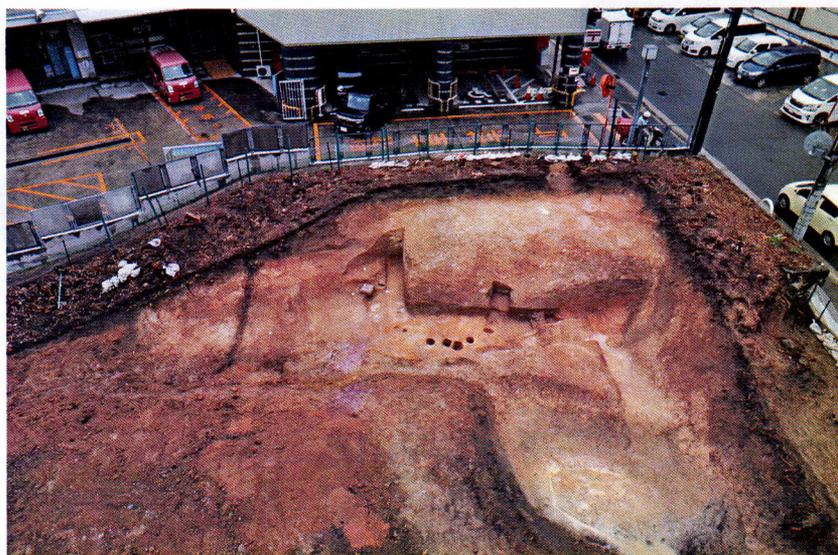
堆積物を古い順に説明すると、まず郭の南斜面沿いにみられる焼土や炭の入った土が流入しています。

その後、堀の底付近の埋土3が堆積し、その上部に郭側から盛土の一部が流入します。そして埋土2、土塁の崩落土、埋土1が堆積して堀は完全に埋没します。埋土1～3は灰色系の砂層で、風雨など自然の環境下での堆積物と考えられます。

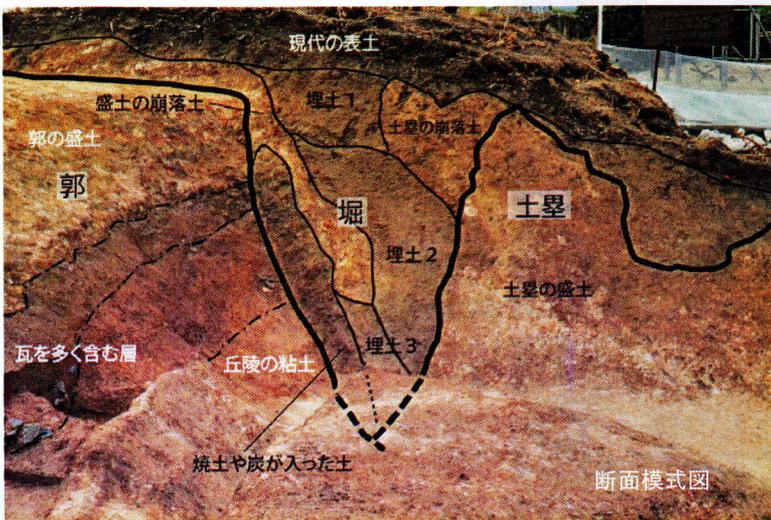
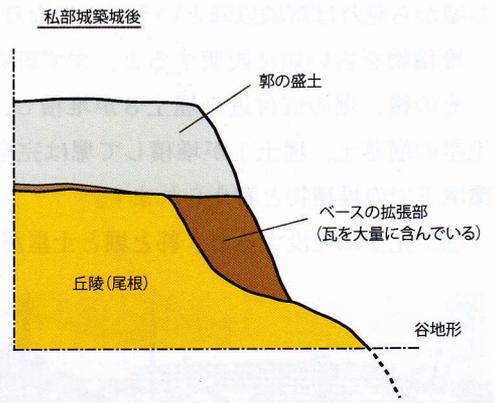
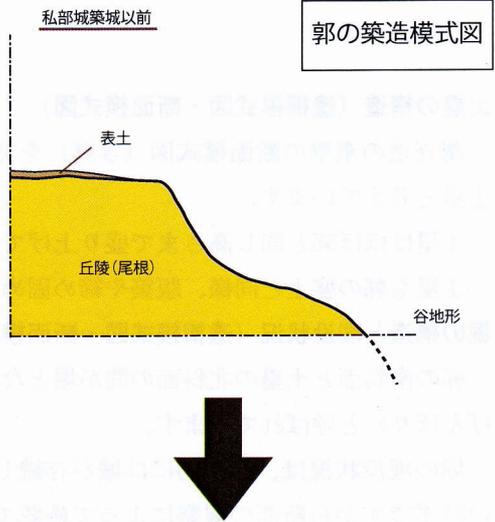
堀が完全に埋没すると、郭と堀と土塁が一体化してその上を表土が覆っています。



調査地から本郭をのぞむ



調査地全景



軒平瓦



鬼瓦



軒丸瓦

